

# Camels on the Early Eastern Silk Road

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kikuchi, Hiroki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00066113">https://doi.org/10.24517/00066113</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 初期東部絲綢之路の駱駝 Camels on the early eastern Silk Road

菊地 大樹（蘭州大学考古学及博物館学研究所）

KIKUCHI Hiroki (Department of Archaeology and Museology, Lanzhou University)

はじめに

東西交通路として栄えたシルクロード（中名：絲綢之路）は、古来より多くの人々が往来し、さまざまな物質文化や情報が伝わるなど、ユーラシア大陸を躍動させる原動力のひとつとしての機能してきた。洛陽、長安から河西回廊をわたり、天山北路から中央アジアを經由して西方のローマへと続く悠久の道は、おおよそ砂漠を中心とした乾燥地帯にあることから、移動手段にはそうした環境に適応した家畜動物が利用されてきた。その代表にラクダ（駱駝）が挙げられる。

ラクダは、偶蹄目ラクダ科ラクダ属として、6000BP 頃に西アジアで家畜化されたヒトコブラクダ (*Camelus dromedarius*、中名：単峰駝) と、4500BP 頃に中央アジアで家畜化されたフタコブラクダ (*Camelus bactrianus*、中名：双峰駝) に大きく分類される（本郷 2006、Reitz et al. 2008、張ほか 2014）。ヒトコブラクダの野生種はすでに絶滅しているが、フタコブラクダの野生種は、中国ではタクラマカン（塔克拉瑪幹）砂漠やゴビ（戈壁）砂漠などで生息が確認されている（羅 2013、張ほか 2014）。体高は 2m ほど、体重は 450～900kg で、暑さや乾燥への耐久力のほか、長期間水を飲まなくても行動できる生理的な特徴を持ち合わせていることに加え、寿命が 35～40 歳と長いことから、遊牧社会のなかで重宝されてきた。特に砂漠の移動では力を発揮し、別名「砂漠の船」とも称される。中央アジアで家畜化されたフタコブラクダは、その後に中国へと伝わり、3000BP 頃に甘粛省西部地区で家畜化されたと考えられているが（傳ほか 2009）、いまのところ、明確な証拠はみつからない。

この乾燥地帯に適応するラクダが、遊牧社会で家畜化され中国へ伝わってきたのは、漢武帝が張騫を大宛国へ遣わし、シルクロードが本格的に拓かれた漢代以降であると考えられており、『史記』、『漢書』や『後漢書』といった歴史書にその名が登場することで、導入過程について早くから議論されてきた（賀ほか 1981、1986）。

近年、陝西省西安市臨潼区の秦始皇帝陵園外城西側にある大型陪葬墓が発掘調査され、平面が中字形を呈する 1 号墓 (QLCM1) から、金および銀製のラクダ像が発見された（蔣 2021、図 1）。このラクダ像は、瘤の数からフタコブラクダであり、注目すべきは、右太腿部分に四つ葉状の文様が確認できることである。秦の簡牘には、所有する馬に焼印を押して管理することが記されており（「秦代出土文字史料の研究」班 2018）、おそらく献上品としてのラクダにも焼印が押されていたのであろう。そうだとすれば、戦国秦の段階において、すでに西域よりラクダ、もしくはラクダという動物の情報が伝わっていた可能性は高い。

このように、近年の発掘調査の進展によってラクダにかんする新資料が増加しつつあり、これまで考えられていたラクダの伝来時期が遡る可能性が強くなってきた。こうした考えは羅（2013）や張ほか（2014）などにおいてもすでに示唆されているところであるが、本稿では、その後に発表された戦国時代以前のラクダにかんする考古資料や動物骨を再整理しながら、ラクダを通じた初期東部シルクロードの交流について考えてみたい。

### 歴史書にみるラクダ

中国古代のラクダにかんする記録を遡ると、これま



図 1 秦始皇帝陵園外城陪葬墓出土金銀駱駝像

でのところ甲骨文や金文には認められず、漢代以降に編纂された多くの書物に登場する。『史記』匈奴列伝には、「唐虞以上有山戎、獫狁、葷粥、居于北蛮、随畜牧而转移。其畜之所多則馬、牛、羊、其奇畜則橐駝、驢、羸（騾の意、牡驢と牝馬の雑種）、馱駝（牡馬と牝驢の雑種）、駒騄（青毛の野生馬）、驎駝（野馬）」とある。「橐駝」は「駱駝」の意であることから、草原地帯の遊牧民たちが、当時からウシ、ウマやヒツジといった代表的な牧畜家畜のほか、羸や馱駝などの特殊な家畜とともにラクダも飼育していた。こうした内容は『逸周書』王会解などにもみられる。また、『戦国策』楚策には「大王誠能聴臣之愚計、則韓、魏、齊、燕、趙、衛之妙音美人、必充後宮矣。趙、代良馬橐駝、必実於外廄。」とあり、趙国の領域や、良馬の生産地として名高い代国の地（現在の河北省西北部から山西省東北部一帯）において、すでにラクダが飼育されていたことがわかる。この『戦国策』を頼りに、当時すでにラクダが導入されていたとも考えられるが（賀ほか 1981、袁 2015）、『戦国策』は前漢の劉向により編まれたものであるため、戦国時代の実態をどこまで反映しているか注意が必要であろう。しかし、当時、遊牧社会においてはラクダが普遍的な存在であり、彼らと交流があった国では、すでにラクダの情報は広く知れ渡っていたと考えられる。『前漢紀』孝宣皇帝紀や『後漢書』班梁列伝においても、数万頭ものラクダが飼われていたことが記されており、漢代の画像石には、ラクダに乗る胡人が描かれている。『塩鉄論』崇礼第三十七には、「騾驢馱駝、北狄之常畜也。」とあり、また『漢官儀』漢旧儀二卷補遺二卷には、諸侯王のなかで匈奴単于との印紐に駱駝の意匠が認められることから、漢王朝が北方における駱駝の飼養を強く認識していたことが窺える。

### ラクダの動物考古学的研究

漢代において広く知れ渡っていたラクダであるが、それ以前の記録はこれまで見つかっておらず、さらにその源流を追い求めるには、遺跡出土資料から探る必要がある。漢代より遡るラクダ骨は、新疆維吾爾自治区を中心に、青海省、甘肅省や内蒙古自治区に分布する。

内蒙古自治区伊克昭盟伊金霍洛旗に位置する青銅器時代の朱開溝遺跡では、最も古いラクダ骨が発見されている（内蒙古文物考古研究所ほか 2000）。報告書

によると、遺跡は三時期に分かれ、西北部のⅠ区中央調査区 T107 の二期（二里頭時代併行）四段の層位より、ラクダの上顎臼歯（T107 ④）が出土している。絶対年代は、樹林較正年代で  $3685 \pm 103$  cal BP とされる。このほか、当該遺跡ではラクダの肩甲骨を利用したト骨も報告されているが（黄 1996）、ト骨が出土したという記述以外に詳細はわからない。出土骨はこの 2 点に留まり、このラクダが家畜かどうかの議論までには至っておらず、ゴビ砂漠では、今日においても野生のラクダが生息していることから、多くの研究者は野生のラクダが捕獲されたものであろうと解釈している。

朱開溝遺跡のほか、新疆維吾爾自治区巴里坤哈萨克自治県の巴里坤湖附近では、新疆博物館の研究者によってラクダ骨が採集されている。放射性炭素年代測定が実施され、3000BC という値が出たものの、それ以上の検証はおこなわれていない（斯坦利 1993）。また、甘肅省玉門市火燒溝遺跡からもラクダ骨が発見されているという報告がある（傅ほか 2009、羅 2013、尤ほか 2014、袁 2015）。火燒溝遺跡の年代は、放射性炭素年代測定でおよそ 3700 cal BP と報告されているが（甘肅省博物館 1979）、それ以上の詳細はわからない。遺跡からは、ラクダのほか大量のウシ、ウマ、ヒツジ、イヌやイノシシが墓葬から出土していることから、おそらくこれらの動物は家畜だと考えられている。当該資料は現在、中国社会科学院考古研究所にて分析中のため、その成果が期待される。

以上のような二里頭時代から殷代に併行する時期のラクダ骨が見つまっているが、詳細はよくわからない。遺跡出土資料として明確になるのは、西周時代併行以降、新疆維吾爾自治区において確認されている。

新疆維吾爾自治区輪台县に位置する群巴克墓地では、三つの墓域に分かれた 100 基にもおよぶ墓群が発掘調査されている（中国社会科学院考古研究所新疆工作队ほか 1991）。それぞれの墓は、周辺の墓地と同様に円形または楕円形のマウンドをもつ。当該墓地のマウンドは 6～10m、高さは 20～60cm であり、竪穴土坑墓の墓室は、単室と多室の二種に分かれるという。そのうち群巴克郷の西北約 3km に位置するⅡ号墓地からは、ラクダの犠牲が確認されている。Ⅱ号墓地は、Ⅰ号墓地と異なり中央に設置された墓室のほか、マウンド内の縁辺に小型墓がともなう。小型墓には子供や幼児のほか成人も埋葬されており、さらには、イヌや



図2 本稿であつかう遺跡

ウマの全身骨格が犠牲となっていたほか、ウマやラクダの頭や、僅かにヒツジやウマが部分的に出土する墓も認められる。こうした現象は、和静県の察吾呼墓地とも酷似している。II号墓の放射性炭素年代測定の結果をみると、 $2760 \pm 125$  cal BP、 $2560 \pm 125$  cal BP という値がでており、この年代は、すなわち中原地区の西周時代後期から春秋時代中期に相当する。I号墓地の年代は  $2905 \pm 130$  cal BP、 $2535 \pm 90$  cal BP と、II号墓地よりもやや古く西周時代中期にまで遡るが、おおよその年代幅は察吾呼墓地と相違なく、察吾呼文化が天山南麓に展開していることから、両者は同一文化であった可能性が高い。ただし、察吾呼墓地からはラクダ骨は発見されておらず、詳細は後述するが、僅かにラクダを描いた土器が見つかるのみである。

青海省北西部のツァイダム（柴達木）盆地南部平原の海西蒙古族藏族自治州都蘭県に位置する塔里他里哈遺跡では、平面が卵形を呈した柵列の囲い状遺構が発見されている。囲い内の空白地帯には、厚さ15～20cmにもなるヒツジの糞が大量に確認されるとともに、その中にはウシ、ウマやラクダの糞も混じっていたという（青海省文物管理委員会1963）。発掘担当者は、遺跡から大量の動物骨が出土しており、周辺が牧畜に最適な環境であることから、この遺構を柵と解釈する。当該遺跡の年代は、出土した羊毛製品の放射

性炭素年代測定から、 $2905 \pm 140$  cal BP という値が出ており、およそ西周時代から春秋時代相当となる（呉1981、趙1986）。ただし、ラクダは囲い飼いには適さない事から、ヒツジを中心とした他の牧畜家畜が飼われており、ラクダは柵に繋がれていたかもしれない。

吐魯番市鄯善県三箇橋墓地では、27基の墓葬のほか、6基の動物の犠牲坑が発掘調査されている（新疆文物考古研究所ほか2002）。墓は平面が楕円形の堅穴土坑墓を主体とし、堅穴偏室墓や土洞墓も確認される。副葬品の内容から、堅穴土坑墓は戦国時代から前漢代、堅穴偏室墓や土洞墓は唐代と時期差がある。6基の犠牲坑は堅穴土坑墓にともなうものであり、平面が円形や曲尺形を呈し、ラクダやウマが犠牲となっていた。そのうち曲尺形の土坑には獣毛で織られた敷物や縄の断片が残っており、犠牲を供える際に用いられたと考えられる。

尼勒克県の加勒克斯卡茵特山北麓の台地上で発見された加勒克斯卡茵特墓地では、700基あまりの墓のうち600基ほどが発掘調査された（新疆文物考古研究所ほか2011）。墓葬はそれぞれ直径10mから40m以上のものまで大小さまざまな規模のマウンドをもち、その多くが表面に一重もしくは二重に不揃いな石を巡らし、周溝をもつものもある。当該墓地では、一次葬のほか二次葬も確認され、二層台をもつ堅穴土坑墓に

二次葬の傾向がみられるという。ラクダ骨の報告は僅かであるが、直径 9.6m、高さ 90cm のマウンドに周溝を巡らせた M80 からは、埋土からウシ、ウマ、ヒツジとともにラクダの頭骨が出土した。当該墓地より出土した木炭の放射性炭素年代測定の結果は、樹林較正年代で  $2345 \pm 35$  cal BP (M42)、 $2250 \pm 35$  cal BP (M51)、 $2345 \pm 35$  cal BP (M56)、 $2275 \pm 35$  cal BP (M60)、 $2325 \pm 35$  cal BP (M68)、 $2490 \pm 35$  cal BP (M73)、 $2280 \pm 40$  cal BP (M104) という値がでており、墓地の主な年代は、戦国時代から前漢代と考えられる。

このように、新疆維吾爾自治区の北疆地区を中心にラクダ骨が確認され、その年代は西周時代から戦国時代に集中する。出土状況をみると、ウシ、ウマやヒツジといった牧畜家畜とともに犠牲となっているが、その比率は他の家畜よりも極端に低い。その背景には、ラクダが大量の繁殖に適さない動物であり、また、遊牧社会における家畜の所有形態とも関係がある。

当該地域におけるもっとも古いラクダの利用をみると、群巴克墓地の年代から、西周時代後期には西北地域で家畜ラクダの利用が始まっていたと考えられるが、当時はシルクロードが本格的に開通しておらず、この地ははまだ西周王朝や戦国秦の統制が及ばない辺疆の地であった。塔里他里哈遺跡についてはラクダの糞が出たとの報告しかないため、今後、周辺遺跡における調査の進展が期待される。

新疆維吾爾自治区の天山山脈東麓、トルファン（吐魯番）盆地と河西回廊が接する地は、古来より東西交流の要所として発展してきた。この哈密地区巴里坤県では、青銅時代から初期鉄器時代の遺跡が点在している。そのうちのひとつである石人子溝遺跡（東黒溝遺跡）からは、高台建築遺構 1 基と石囲いの住居址 5 基のほか、中小型墓が 12 基発見された（新疆文物考古研究所ほか 2009）。12 基の墓のうち、直径 10m、高さ約 80cm の円形墳丘状の石積みをもつ中型貴族墓 M12 には、3 基の犠牲坑がともなっており、西側に位置する犠牲坑 K1 には、ラクダが 1 個体埋葬されていた（尤ほか 2014、図 3）。このほか、高台と石囲いの住居址からもラクダ骨の一部が見つかった。出土したラクダ骨の形態的特徴から、報告者はフタコブラクダであると同定している。犠牲坑から出土したラクダ骨の最小個体数は 1 個体であり、住居址より出土したラクダ骨も最小個体数は 1 個体であるという。犠牲坑 K1



図 3 石人子溝遺跡 M12 犠牲坑 K1 出土ラクダ

より出土したラクダの関節の癒合状態、歯の萌出および磨耗段階から推定される年齢は 7～8 歳であり、犬歯の発達状態からオスの個体であろうと判断されている。大きな特徴としては、第 2 腰椎と寛骨に解体痕が認められ、この個体は、腰から後肢の脛骨までが欠落しており、当該部位が意図的に切り取られたものと考えられる。また、第 11～12 胸椎の棘突起部分に顕著な圧迫痕などが認められるほか、指骨にも骨増殖が確認されるという。一般的に大型家畜が役畜として利用される場合、騎乗もしくは運搬手段として用いられることが多く、その負荷のかかり具合で骨病変の出現率が高くなる（尤ほか 2017）。犠牲ラクダの胸椎棘突起には、荷重による圧迫痕が認められるが、同じような痕跡は、同遺跡で出土した犠牲馬にも確認されるという（李ほか 2016）。放射性炭素年代測定の結果は、犠牲坑のラクダが 360-170BC、高台建築の東スロープ②層出土ラクダ骨で 200-50BC というやや幅の広い年代となっている。

犠牲坑のラクダ骨については動物考古学的な分析が実施されており、各部位の計測値から、この個体が内蒙古自治区薩拉烏蘇河流域で発見された、更新世後期のラクダ化石骨（祁 1975、*Camelus knoblochi Brandt*、中名：諾氏駝）よりやや小型で、現代の家畜フタコブラクダの計測値よりは大きいという。また、遺跡から出土したラクダの最小個体数は 2 個体となるが、同遺跡から出土したヒツジ 152 個体とウマ 9 個体とは圧倒的に数が少ない。

この現象については、周辺で生業を営む現代のモンゴル民族の家庭で所有する家畜頭数について調査したところ、ラクダ、ウマとヒツジの比率は、1 : 2 : 50 と 1 : 3 : 100 であり、やはりラクダの所有頭数の少なさも顕著であったという。その理由として、ラクダの

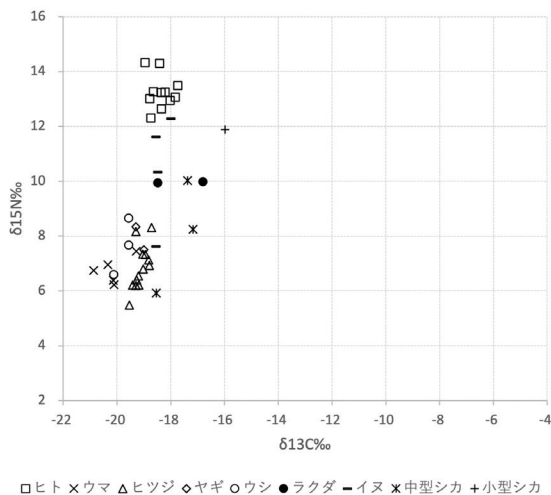


図4 石人子溝遺跡の炭素・窒素同位体比分析

用途は主に運搬用であり、家族単位の荷物を運搬するだけならば特に大量の所有は必要とされない。こうした現象が昨今の遊牧社会で共通していることは大変興味深く、今後、古代の牧畜家畜の所有比率を考えると参考になる。M12 にともなう犠牲動物は、ラクダのほか3頭のウマがおり、うち2頭は他の二つの犠牲坑に埋葬されていたが、1頭は墓室内に埋葬されていた。これらの家畜は、おそらくすべて墓主の所有物であったのであろう。

石人子溝遺跡から出土した動物骨は炭素・窒素同位体分析もおこなわれている。結果をみると、ラクダはウシ、ウマ、ヒツジやヤギなどの牧畜家畜よりも窒素同位体比が高いことがわかる（凌ほか2013、2016、図4）。ラクダは乾燥した環境に耐性があることは良く知られており、窒素の高さは代謝機能に由来すると考えられる。また、当該地域に生息するマメ科の駱駝刺 (*Alhagi sparsifolia* Shap.) といった植物を食する事に起因するという意見もあるが、データの蓄積が少ないため、今後の研究成果を待ちたい。このほか、古代DNA分析も進められており、高台建築のスロープより出土したラクダ骨（高台東坡②）の mtDNA を調べたところ、現代の家畜フタコブラクダと近似していることが明らかとなった。

ラクダは5歳で成獣となり、妊娠期間は390～410日、一度妊娠出産すると次の妊娠まで3年以上期間を空ける必要があり、繁殖が大変遅い。また、性格も温厚ではなく、発情期のオスは手がつけられないことから、囲い飼いには適さないという。しかし、砂漠での

運搬のほか、戦時にはウマのかわりに、また車や犁を牽くことができ、肉、ミルクや毛を提供し、糞便も燃料となるなど、遊牧経済のなかで貴重な資源を提供する家畜として重宝されている。また、宗教活動としては、肥えさせ去勢されたラクダが供儀として捧げられ、解体された後の骨は骨角器や装飾品として加工された。石人子溝遺跡のラクダは、腰椎の後半部から寛骨、大腿骨と大部分の脛骨が欠落しており、この部分は最も肉付きの良いところであるため、埋葬前の祭祀活動に供えられた可能性も考えられよう。当該遺跡の被葬者の形態的特徴は古代の欧州系の特徴を持ち合わせているとされ（陳ほか2016）、今後、東部ユーラシア交流史を考えるうえで、当該遺跡の学際的研究成果は、ひとつの基軸データとなり得る。

このほか、ラクダが確実に漢の都長安まで辿り着いていた事例として、陝西省咸陽市漢昭帝平陵陪葬坑より出土した、33個体のラクダが挙げられる。平面が南北に向かって長方形を呈し、北端にスロープをもつ二号陪葬坑には、坑内の東西両側にそれぞれ27か所、計54か所にもなる洞室があり、洞室には1頭ずつ大型哺乳動物が埋葬されていた。初歩的な同定の結果、ラクダ、ウシとロバの三種が確認され、ラクダは33頭、ウシ11頭、ロバ10頭と、ラクダが最も多かったという（袁2007）。このほか、三号坑からは、4頭立ての木製駱駝車が出土しており、ラクダはすべてフタコブラクダであったことから、二号坑から出土したラクダもフタコブラクダであった可能性が高いという。昭帝の没年は紀元前74年であることから、少なくともそれ以前に西域のラクダは西安一帯にまで到来していたのであろう。

#### 戦国時代以前のラクダ意匠

これまで、遺跡から出土したラクダ骨について概観してきた。次に考古資料にみられるラクダ意匠について見てみることにする。

新疆維吾爾自治区和静県察吾呼墓地は、青銅時代から初期鉄器時代の大規模墳墓群である（新疆文物考古研究所1999）。河岸段丘上に形成された石室墓群は、墓葬形態、動物犠牲や副葬品などから遊牧民の墓域であることがわかる。五つの墓域のうち、700基にもおよぶ大規模な墓群を形成する一号墓地の315号石室墓からは、ラクダ意匠をもつ挾砂紅陶の陶帶流罐(M315:

5) が出土している。罐は把手部分が破損しているが、頸部をみると、ラクダが隊列を組みつつ、伏して休憩している様相が描かれているのがわかる（図5）。ラクダは計7頭描かれており、背中には瘤が二つあることから、フタコブラクダだとわかる。一号墓地の遺跡年代は、放射性炭素年代測定で  $3260 \pm 155\text{BP}$ 、 $2512 \pm 51\text{BP}$  と幅があるが、およそ西周時代から春秋時代併行に形成されていたことがわかる。

また、近年、西周王朝の西北辺疆戦略を考えるうえでも注目されている、姚河塬西周墓地が発見された、寧夏回族自治区固原市彭陽県一帯では、これまで春秋戦国時代の墓が多数発見されており、そのうち草廟郷の張街村墓地では、竪穴土坑墓や土洞墓から、ウシ、ウマとヒツジの頭骨犠牲が認められ、副葬品として兵器、道具類、車馬飾りや装飾品など多様な青銅器が計160点出土している（楊ほか1999）。出土した青銅器から、墓の年代は春秋後期から戦国中後期と推定される。青銅器には多種多様な動物紋が認められるが、そのなかに伏した駱駝の背に騎乗した人物が表現された、長さ6.3cm、幅5.1cmの青銅飾が3点確認された（図6）。騎乗の人物は丈の長い衣服を纏い、腰にベルトを締め、右手でラクダの鬃を掴んでいる。同じく寧夏中衛県狼窩子墓群より出土した青銅器のなかにも、駱駝に似た青銅飾（M5：44）が1点出土したという報告があるものの（周1989）、残念ながら図が無いので確認できない。張街村墓地で発見された駱駝形飾以外は、管見のかぎり当該地域における同時期のラクダ意匠は他に例がなく、彭陽一帯の人々だけが、どのようにしてラクダ形の青銅飾りを製作できたのかは謎であ



図5 察吾呼墓地出土のラクダ意匠をもつ陶帯流罐



図6 張街村墓地出土駱駝形飾

る。墓の動物犠牲の特徴から、被葬者らが遊牧民であることは明らかであり、西域の情報を知り得る手段を持ち合わせていたはずであることから、何らかの形でラクダの情報を得ていたのであろう。こうした局所的な事例は、遠く南方でも確認される。

湖北省江陵県では、春秋戦国時代の楚国の都「郢」の城址である紀南城から北西に約7kmの位置にある、望山一、二号墓および沙塚一号墓が発掘調査されている（湖北省文化局文物工作隊1966）。望山二号墓と沙塚一号墓は盗掘の被害にあっており、副葬品の一部は持ち去られていたものの、棺槨は被害を免れて状態よく残り、被葬者も荒らされていなかった。これらの墓は地下水位が高かったことから、幸いにも木質や皮革製品といった有機質遺物の保存状態が大変よく、当時の社会、文化を知るうえで貴重な文物が大量に出土している。望山二号墓の前室からは、直立したラクダの背に騎乗した人物が円形の灯座をもつ、通高19.2cmの銅製灯台が出土した（図7）。

ラクダの造形は細部まで精巧に作られており、伝聞や想像だけでは作り得ないものである。ラクダはその生態的特徴から、温暖湿潤な長江流域の気候では生息することが難しく、南方ではこれまでラクダ骨は出土していない。また、類似した製品は、西北地域を拠点としていた秦国のほか、他の地域においても見つからず、楚の人々がどのようにラクダの情報を知り得たのか不明である。望山二号墓の年代は戦国中期前半に位置づけられるが、この時期の楚国では、九連墩楚墓や熊家冢墓地などで大規模な車馬埋葬が出現している。地理的に馬の供給源に乏しい楚国がどのようにして大量の軍馬を手に入っていたのか、いまだ良くわかってはいないが、戦国楚では長城地帯に接する国を通さずとも草原地帯の情報を得ることが可能であったのだろうか。この点については、更なる検証が必要となるが、少なくとも中原地区において、ラクダ意匠は



図7 望山二号楚墓出土人騎駱駝灯

春秋戦国以前までは遡らないことが明らかとなった。

#### おわりに

戦国時代以前の東部シルクロードにみられるラクダの展開について、動物骨と考古資料の両面から検討した。中国では、本格的にシルクロードが開通する漢代以降になって、本格的に中原地区でラクダが普及し始める。このことは、歴史書や遺跡から出土する膨大なラクダ意匠などからも明らかである。しかし、その萌芽は西周時代に西北の疆外ですでに生まれていたことが明らかとなった。群巴克墓地や察吾呼墓地に代表される天山山脈一帯では、中原地区の西周時代併行期の段階で、すでに中央アジアからの第一波として家畜ラクダの利用が始まっており、その後、天山北路に沿って徐々に東へと展開し、春秋戦国時代には河西回廊付近まで広域に家畜ラクダが普及していた。西周時代の棗樹溝脳遺跡出土馬の古代DNA分析では、すでに中央アジア由来の系統が認められ(趙ほか2014)、また、西周王朝の中心地とされる周原遺跡群や豊鎬遺跡からは、遊牧社会に特徴的なウシ、ウマやヒツジの頭骨を墓に供える動物犠牲が確認されることから、当時より遊牧民を介した西域との交流が強く想定される。北疆地区に波及した家畜ラクダ利用が、その後、牧柵が発

見された青海省の搭里他里哈遺跡まで到達していたのであれば、西周王朝や戦国秦が西域の新たな馬種を求めなかで、ラクダの情報を得ていたかもしれない。

このように、ラクダを受容する環境は、疆外から徐々に整えられ、遊牧民との交流が活発となる春秋戦国時代において、第二波として断片的な情報が局所的に秦王朝へと伝播し、遂には始皇帝に献上された可能性も考えられよう。こうした段階的な展開過程の詳細については、稿を改めて論じたい。

#### 謝辞

本稿を執筆するにあたり、寧夏文物考古研究所、小田木治太郎氏(天理大学)、尤悦氏(首都師範大学)、陳洪氏および馮錯氏(秦始皇帝博物院)には、写真利用に関して便宜を図っていただいた。また、大日方一郎氏(國學院大学)には、関連文献の収集でご協力いただいた。末筆ながら感謝申し上げます。本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金24520871、18H05444、20H05819、21H00602による成果の一部である。

#### 参考文献

- 「秦代出土文字史料の研究」班・齋藤賢・畑野吉則・藤井律之・宮宅潔・宗周太郎・目黒杏子2018「嶽麓書院所藏簡〈秦律令(壹)〉譯注稿その(二)」『東方學報』第93冊:1-66
- 本郷一美2006「ヒトコブラクダの家畜化と伝播」『西南アジア研究』No.65:56-72
- 袁靖2007「動物考古学掲密古代人類和動物的相互關係」『西部考古』第二輯、三秦出版社:82-95
- 袁靖2015『中国動物考古学』文物出版社
- 甘肅省博物館1979「甘肅省文物考古工作三十年」『文物考古工作三十年』文物出版社:139-153
- 賀新民・楊憲孝1981「中国駱駝發展史(上)」『農業考古』1981年第1期:94-102
- 賀新民・楊憲孝・張仲葛1986「中国双峰駱駝起源考」『中国農史』1986年第2期:115-118
- 祁国琴1975「内蒙古薩拉烏蘇河流域第四紀哺乳動物化石」『古脊椎動物与古人類』第13卷第4期:239-249
- 黄蘊平1996「朱開溝遺址獸骨的鑑定与研究」『考古學報』1996年第4期:515-536
- 湖北省文化局文物工作队1966「湖北江陵三座大型楚墓出土大批重要文物」『文物』1966年第5期:38-55
- 周興華1989「寧夏中衛県狼窩子坑的青銅短劍墓群」『考古』1989年第11期:971-980
- 蔣文孝2021「秦始皇陵陵西墓葬的勘探与發掘」『藝術品鑑』2021年第7期:66-69
- 新疆文物考古研究所1999『新疆察吾呼』東方出版社
- 新疆文物考古研究所・新疆大学歴史系・吐魯番地区博物館・鄯善県文化局2002「新疆鄯善三個橋墓葬發掘簡報」『文物』2002年第6期:46-56



- 新疆文物考古研究所・西北大学文化遺産与考古学研究中心 2009 「新疆巴里坤東黑溝遺址 2006～2007 年發掘簡報」『考古』2009 年第 1 期：3-27
- 新疆文物考古研究所・西北大学文化遺産与考古研究中心・伊犁州哈薩克自治州文物局 2011 「新疆尼勒克縣加勒斯卡茵特墓地發掘簡報」『考古与文物』2011 年第 5 期：20-29
- 斯坦利 J. 奧爾森 1993 「中国是動物早期馴化的一個中心」『人類学学報』第 12 卷第 2 期：120-125
- 中国社会科学院考古研究所新疆工作隊・新疆巴音郭楞蒙古自治州文管所 1991 「新疆輪台縣群巴克墓葬第二、三次發掘簡報」『新疆文物』2006 年第 3-4 期：684-736
- 趙欣・尤悦・王建新・馬健・任萌・袁靖・楊東亞 2014 「新疆石人子溝遺址出土家馬的 DNA 研究」『第四紀研究』第 34 卷第 1 期：187-195
- 趙信 1986 「青海諾木洪文化農業小議」『農業考古』1986 年第 1 期：86
- 張小雲・羅運兵 「中国駱駝馴化起源的考古学觀察」『古今農業』2014 年第 1 期：47-55
- 陳靚・馬健・景雅琴 2016 「新疆巴里坤縣石人子溝遺址人骨的種系研究」『西部考古』第 12 輯：112-123
- 內蒙古自治區文物考古研究所・鄂爾多斯博物館 2000 『朱開溝』文物出版社。
- 傅羅文・袁靖・李水城 2009 「論中国甘青地区新石器時代家養動物的来源及特征」『考古』2009 年第 5 期：80-86
- 青海省文物管理委員會・中国科学院考古研究所青海隊 1963 「青海都蘭縣諾木洪塔里他里哈遺址調查与試掘」『考古学報』1963 年第 1 期：17-41
- 吳汝祚 1981 「略談諾木洪文化」『青海考古学会会刊』1981 年 3 期：42-48
- 楊寧国・祁悦章 1999 「寧夏彭陽縣近年出土的北方系青銅器」『考古』1999 年第 12 期：28-37
- 尤悦・王建新・趙欣・凌雪・陳相龍・馬健・任萌・袁靖 2014 「新疆石人子溝遺址出土双峰駝的動物考古学研究」『第四紀研究』第 34 卷第 1 期：173-186
- 尤悦・于建軍・陳相龍・李悦 2017 「早期鉄器時代游牧人群用馬策略初探—以新疆喀拉蘇墓地 M15 随葬馬匹的動物考古学研究為例」『西域研究』2017 年第 4 期：99-111
- 羅運兵 2013 「我国駱駝的早期馴養与拡散」四川省威遠縣人民政府・中国農業歴史学会・西南地区中獸医学会 編『中国『活獸慈舟』学術研討会論文集』四川省威遠縣人民政府：13-21
- 李悦・尤悦・劉一婷・徐諾・王建新・馬健・任萌・習通源 2016 「新疆石人子溝与西溝遺址出土馬骨脊椎異常現象研究」『考古』2016 年第 1 期：108-120
- 凌雪・陳曦・王建新・陳靚・馬健・任萌・習通源 2013 「新疆巴里坤東黑溝遺址出土人骨的碳氮同位素分析」『人類学学報』2013 年第 32 卷第 2 期：219-225
- 凌雪・蘭棟・陳曦・馬健・王建新・尤悦 2016 「新疆巴里坤東黑溝遺址出土動物骨骼的碳氮同位素分析」『西部考古』第 11 輯：289-299

Reitz E. J. & Wing E. S. 2008 Zooarchaeology (second edition), Cambridge University Press.

#### 図版出典

- 図 1 『人民日報』2022 年 1 月 21 日版より転載
- 図 2 筆者作成
- 図 3 尤悦氏提供
- 図 4 凌雪ほか 2013、2016 をもとに筆者作成
- 図 5 新疆文物考古研究所 1999 より転載
- 図 6 小田木治太郎氏提供
- 図 7 筆者撮影